

Title	書評：デビット・ノッター著『純潔の近代： 近代家族と親密性の比較社会学』（慶應義塾大学出版会，2007）
Sub Title	
Author	阪井，裕一郎(Sakai, Yuichiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.66 (2008.) ,p.91- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000066-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：デビッド・ノッター著
『純潔の近代——近代家族と親密性の比較社会学——』

(慶應義塾大学出版会, 2007)

阪井 裕一郎*
Yuichiro Sakai

本書は、著者が2005年に京都大学大学院教育学研究科に提出した博士論文を加筆・修正したものである。本書の問いは、「近代におけるロマンティック・ラブとは何か」であり、主に、「ホーム」の理想が中産階級の間定着した19世紀の米国と、「家庭」の理想が新中産階級に定着した大正期日本の二つを考察対象として検討が行われる。

本書はその方法論・分析視角に独自性がある。著者の問題意識の基底には、「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」に関する従来の研究の多くが「機能主義パラダイム」に依拠してきたことに対する批判がある。批判は主に、それらが「歴史」「文化」の視点を排除している点に向けられており、「文化」「歴史」「比較」「感情現象の把握」という四つの新たな視角から「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」を分析しようという点に本書の特徴がある。また、「結婚と恋愛の二つの関係性」がいかなる変化を遂げたかという問題は、「個々の社会のシンボル・システムや『文化』とかかかわっている問題であり、『近代化』というマジックワードだけで見えてくる問題ではない」(114頁)という指摘にも明らかのように、「文化」「イデオロギー」「シンボル・システム」に目を向けることで、「目的論的」「単系的」「斉一的」な近代化図式に依拠した従来の近代家族論や恋愛論を超克し、「近代家族のバリエーション」を提示していかうという試みでもある。

以上の問題意識、さらに、全体を貫いている著者の視点や内容を考えると、「比較社会学」と題される本書は、「ロマンティック・ラブ・イデオロギーの文化社会学(あるいは知識社会学)」と呼ばれるによりふさわしいものと思われる¹⁾。評者は、本書の主題および構成、内容は、本書のもつ知識社会的性質に着目することで、初めて正当に評価できるものであると考える。知識社会学の重要なテーマは、いかなる場合に人々が正しい認識を抱くかを解明する点にあり、その分析対象となる「イデオロギー」とは、「虚偽」であることを本質としながら、なお機能し続ける知識の体系のことである。本書の「文化の視点」が分析するのは、人々にとっての「聖」や「信念」であるところの「シンボル・システム」(知識体系)であり、(著者は決して明示していないものの)「イデオロギー分析」とも大きく重なるものであろう。ゆえに、その点が考慮されなければ、本書は様々な解釈・批判にさらされる危険をも有しているという

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻後期博士課程(家族社会学・歴史社会学)

ことである（本書に対しては階層的視点の希薄さや資料の限定性などといった点から批判が寄せられることが予想される）。

著者も述べているように、これまで「近代家族」に関しては、定義をめぐる議論や、国家との関連性などの視点から数多くの研究が蓄積されてきた。本書は、こうした先行研究を十分に踏まえながらも、「文化」「比較」という視点を取り込んだ独自の方法を用いることによって、従来の近代家族論において看過されてきた多くの問題を浮き彫りしようと試みているといえるだろう。

では、本書の構成と内容を見ていくことにしたい。全体は三部構成で、補章を含め全七章からなる。章立ては以下のようになっている。

I・純潔の構造

第一章 聖と俗としての恋愛

第二章 男女交際・コートシップ

II・恋愛至上主義の時代

第三章 恋愛至上主義の栄光と陥穽

第四章 日本における友愛結婚の誕生

III・「恋愛結婚」と「近代家族」

第五章 「恋愛結婚イデオロギー」再考

第六章 恋愛・再帰性・テロス

補章 家内性の核の日米比較に向けて

まず第I部では、本書の鍵となる「純潔」概念について詳細な検討が行われる。著者によれば、この「純潔」の規範こそ、近代以後に誕生した「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」と呼ばれる「性一愛一結婚の三位一体」（結婚は恋愛によって正当化されると同時に、性交渉は結婚に独占される仕組み）を成立させる「接着剤」の機能を担うものである。第一章において、著者は「ロマンティック・ラブ」の意味を解明するには、情緒性や愛情、恋愛などの感情現象を支える「シンボル・システム」への着目が重要であり、その分析にはデュルケムの聖俗理論こそが有効であると述べる。恋愛を取り巻く様々な「シンボル」や「信念」を聖俗理論の観点から分析することで、ロマンティック・ラブが、「愛の聖化」と「セクシュアリティの瀆化」、すなわち、「性が愛を脅かすと同時に、逆に性が愛によって正当化される」という「純潔のパラドクス」の上に成立したことを明らかにするのである。

つづく第二章では、日米の「男女交際」の意味・内容を比較検討することを通して、日米の「近代家族」の相違が明らかにされる。著者は、日本の「男女交際」言説が強化した「純潔」規範の内容と、米国の「バンドリング」や「デーティング」といった多様な男女交際に見られる「純潔」規範の内容を比較検討する。結局、近代家族の形成期、米国では「男女交際と純潔概念の共存」が可能であったのに対し、日本では「相互排除的な存在」であったことが明らかにされる。そして、「『日本的近代家族』が『恋愛結婚』の媒介なしに成立した」という、これまでの通説を覆す結論を導き出すのである。

第II部では、主に大正期日本における「恋愛」「ロマンティック・ラブ」の受容過程について考察がなされている。まず第三章では、大正期に隆盛した「恋愛至上主義」の意味が検討される。『主婦之友』と『婦人公論』における「恋愛結婚」「男女交際」言説の検証から明らかになるのは、大正期における「恋

愛結婚」言説の意味論的変容であり、恋愛至上主義が「既存の配偶者選択制度を脅かさない、牙を抜かれたイデオロギー」と変容していく過程であった。著者は、ラディカルなはずの恋愛至上主義が「恋愛結婚」に不可欠な男女交際を否定したという点に、大正期日本における「恋愛至上主義の陥穽」を見る。

つづく第四章では、家内性の中心を担った様々な「愛」について考察が行われている。大正期には、神聖なる「家庭」とその支えとなる「温かい夫婦関係」という理想モデルが定着した。つまり、「夫婦に愛があることが望ましい」という近代的な結婚観自体は戦前期の日本にもすでに定着していたが、それは欧米のような情熱的なロマンティック・ラブとは異質の「友愛結婚」のモデルであったと指摘されるのである。「恋愛結婚」ではなく「友愛結婚」を媒介にして近代家族が形成された点に著者は日本型近代家族の特徴を見るのである。

第Ⅲ部においては、「恋愛結婚」と「近代家族」の関係性が問い直される。まず第五章にて、大正期における「恋愛」ないし「恋愛結婚」という言葉の意味論的変容が検討され、「恋愛結婚は近代家族の必須条件である」という「常識」的見解が妥当ではないことが明らかにされる。著者は、「単系的発展論」から脱却しきれていない機能主義的な「恋愛結婚」分析を批判し、「近代家族」の比較は、「タイムラグ」ではなく「バリエーション」として把握すべきだと主張するのである。ここでは、既存の恋愛結婚論の限界を指摘しながら、「米国では近代家族の誕生と『恋愛結婚』の誕生が同時期であるのに対して、大正期の新中産階級の間から登場した『家庭』という日本型近代家族は『恋愛結婚』の媒介なしに成立した」と結論づけられる(112頁)。すなわち、著者によれば「近代家族」にとって「ロマンティック・ラブは必須条件でなかった」のである。最後に第六章では、近代家族論の古典であるストーンとショーターの議論を検討し、両者の限界を浮き彫りにすることを通じて、さらには、現代人の親密性を特徴づけている「再帰性」概念との対比を通じて、「ロマンティック・ラブ」が有している「宗教性」が今一度確認される。著者の文化的視点の理論的有効性が、この章を通じて補強されているといえるだろう。

以上、構成と内容を見てきたが、刺激的な主張と批判にみちた本書が、家族社会学や家族史の分野に与える影響はきわめて大きいと考えられる。紙幅の制約上、ここでは評者が特に重要と考える点のみ限定して本書の成果について言及しておきたい。

まずは、方法論・分析視角についてである。「近代家族のバリエーション」への着目を重視する本書は、「古典的近代化モデルの限界」以後の新たな近代社会分析の方法を実践的に提示した試みとして評価できるであろう²⁾。著者自身、「あとがき」で「文化分析への挑戦」と述べているが、近代家族論の新たな方法基準を提示しているといえる。

また、「文化」に焦点をあてた歴史社会学研究である本書は、家族や親密性の「変容」が顕著になりつつある現代日本の状況に対しても示唆に富んでいる。家族の「多様化」が叫ばれる一方で、欧米諸国と比較した際、「日本でみられる近代家族の執拗な残存」(167頁)もまた顕著になっている³⁾。その要因を探るには、共時的な比較のみならず、歴史的な視点からの比較研究が不可欠である。家族が「多様化」の兆しをみせるなか、改めて「画一化」の形成過程を具に検討する本書のような作業は今後ますます重要になるであろう。

もう一つ述べておきたいのは、末巻の参考文献リストのもつ価値である。これまで日本の家族研究では注目されていなかった海外文献が数多く掲載されている本書の文献リストは、この分野に関心をもつすべてのものにとって貴重な資料になるに違いない。

つづいて最後に、評者が本書に抱いた疑問点についても言及しておきたい。

第一に、第五章の論理展開についてである。本書の中核をなす箇所であるだけに、読後すぐに次のような疑問が残った。それはつまり、「日本においてロマンティック・ラブ・イデオロギーとは何か（存在したのか）」である。著者は、第五章の中心的な議論部分（「恋愛結婚の普及＝ロマンティック・ラブ・イデオロギーの定着」という見解への批判箇所）で、「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」＝「性一愛一結婚の三位一体」という前提のもとに議論を進めている（124頁）。だが、果たしてこれを等式で表すのは妥当であろうか。というのも、第Ⅱ部において著者自身が、大正期日本では「恋愛至上主義」が理想に終わり「ロマンティック・ラブ」が定着しなかった事実を明らかにしているからである。となれば、米国の分析において「三位一体」をこの用語で表すことは適切でも、日本の分析においては不適切なのではないかと思われる。ここにおいて、結局、著者の言う日本における「ロマンティック・ラブ（・イデオロギー）」の内容が不明瞭のままであるように思われるのである。各章ごとの用語は複雑な論理展開にもかかわらず矛盾なく一貫しているのに比べ、全体を通じて用語・論理の混乱・不明瞭な箇所がいくつか散見された。

第二に、これは本書の規模を考えれば過剰な要求かもしれないが、「文化の視点」「歴史の視点」が強調されるだけに、「シンボル・システム」の分析に物足りなさを感じる。感情現象を的確に把握する上で「シンボル・システム」にこそ焦点を当てるべきという著者の指摘は鋭く、説得力に富んでいる。だが、近代日本における「シンボル・システム」として「母性愛」のみを強調するのは果たして妥当か。西洋から輸入された「母性愛」がなぜ、特に日本において、家内性の核（シンボル）になりえたのか。その要因を、文学や映画等の諸メディアの影響や、育児書等の「科学的知識の普及」といった、それ自体「近代の産物」である根拠のもとに語る方法は、トートロジカルな議論に陥る危険をはらんでいないだろうか。言うまでもなく、「近代」という時代は、そして独立として存在するのではなく、多かれ少なかれ前近代的な文化を内包しつつ展開されるものであろう。評者としては、「母性愛」をも包括するようなより強固な「シンボル」の存在を想定したくなる。すなわち、「シンボル・システム」としての「家」あるいは「(近代的に読み替えられたイデオロギーとしての) 儒教」などである。いくつか例を挙げれば、「祖先崇拜」を基軸とした「家永続の願い」（柳田[1930]1991）、社会の「公-私」構造を支える「義理」（有賀, 1967）、社会組織の核をなす「孝」（川島, 1957）などである⁴⁾。「近代家族のバリエーション」の提示が本書の大きな目的の一つであるからこそ、少なからず、「前近代」と連関する「シンボル・システム」に着目することが必要であるように思われた。ただし、こうしたシンボル・システムの考察については、著者自身「課題」として提示している部分でもあり、今後の発展が期待されるころだといえよう。

以上、いくつか疑問点に言及したが、むしろ、このように読者の思考を刺激し触発していく点にこそ、本書の大きな魅力がある。本書を読むと、「恋愛結婚」や「ロマンティック・ラブ（・イデオロギー）」という言葉が、これまで社会学の研究において特に疑問に附されることなく、きわめて安易に使用されてきたのではないかと思わずにいられない。その用語のもつ意味内容やイデオロギー的側面に、ここまで踏み込んだ研究はなかったといえる。今後、近代の家族や結婚、恋愛を論じる上で、本書は避けることのできない一冊になるといってもよいであろう。少なくとも、日本における近代家族論に「新風」を吹き込むという著者の目論見は十分に成功している。今後、著者への注目は急速に高まっていくと予想されるが、著者のような外国人研究者の登場は、日本の社会学界にとってきわめて幸運な出来事であるように思われる。

注

- 1) ちなみに博士論文の原題は「純潔の近代：ロマンティック・ラブ・イデオロギーの比較社会学」である。
- 2) 「古典的近代化モデル」の限界については佐藤(1998)を参照のこと。
- 3) 欧米と比較した際の現代日本における家族規範の強さ、特に結婚や親密性に関わる「近代家族規範」の強さは、国際比較からも明らかである。国立女性教育会館(2006)、渡辺(2008)を参照のこと。
- 4) 戦前の「家」の近代的性格については多くの歴史研究があり、もはや異論を挟む余地はないといえる。しかし、だからといって「家は近代家族」と強調し、前近代との「連続性」を捨象してしまうことも、落合恵美子の言述を借りれば、「歴史的認識としては勇み足」だといえるであろう(落合, 2000:30)。

参考文献

- 有賀喜左衛門, 1967,『有賀喜左衛門著作集Ⅳ(封建遺制と近代化)』未来社。
- 井上俊, [1966] 1973,「恋愛結婚の誕生:知識社会学的考察」『死にかいの喪失』筑摩書房。
- 川島武宜, 1957,『イデオロギーとしての家族制度』岩波書店。
- 国立女性教育会館, 2006,『平成16年度・17年度家庭教育に関する国際比較調査報告書』。
- ノッター, デビッド, 2006,「近代家族と家族的感情」稲垣恭子編『子ども・学校・社会—教育と文化の社会学』世界思想社。
- , 2008,「近代家族の時代」『三田評論』(1111) 30-34。
- 落合恵美子, 2000,「近代家族をめぐる言説」『近代家族の曲がり角』角川書店。
- 佐藤俊樹, 1998,「近代を語る視線と文体」高坂健次・厚東洋輔編『講座社会学 理論と方法』東京大学出版会。
- 渡辺秀樹, 2008,「家族意識の多様性—国際比較調査に基づいて」『社会学年誌』(49) 39-54。
- 柳田國男, [1930] 1991,『明治大正史 世相篇』講談社学術文庫。